

手塚治虫作品集その20 | 『MW』 上・下二冊 (小学館刊)

はじめに

一九九五年三月一日初版第一刷刊行、二〇〇九年六月二〇日第二五刷を用いる。I巻末にエッセイ「二元論の罫を逃れて」花村萬月さんが「罫がある。天と地、火と水、善と悪……そういった二元論で現実を割り切ろうとする考え方である」と書き出し、「だが、二元論的割り切りは、常に誘惑の甘い匂いを放っているのだ。そして思考のなかに巧みに忍びこんでくる。楽なのだ、二元論的思考は。なぜならば、善と悪、美と醜といった具合に割り切ってしまったとたんに、それでなんらかの真理に到達したような気になれるからだ。また、そういうった表現は、絶対的大多数である阿呆どもに受け入れられやすい。民衆は、白黒はつきりしたものが好き、というわけだ」と続け、手塚治虫にことふれていくとき、「手塚には、大衆にむけられた門切り型の表現である単純な二元論を克服しようという明確な意志があった。その意志に支えられて、男女の境界を平然と踏み越えて結城美知夫は悪の道を疾駆する」とし、段を替えて「だが、悪とはなにか。印象的な……まるでこれを描きたかったがためにこの作品を描き続けたかのような気さえするエンディングを見てしまった私は、勧善懲悪の陳腐な結末に唾を吐いた手塚の意志に胸を打たれた」と述懐する。これはまだまだ続いていく。

『MW』のめざす世界

この「M」と「W」の二文字は、「MAN」と「WOMAN」の頭文字であることを知る。

第一章 誘拐

午前四時の岩嶮しい海岸線を描きスタートする。「ドゥーン／ザザ／ザザ」と波打ち際に碎ける潮騒を奏でる。五人の男達、内四人は顔に汗を浮かべているなか一人だけ涼やかに冷静にこれより成すべき目論見を見守る姿態が描き出されている。多額の身代金を目当ての児童誘拐、そして誘拐犯は用意周到に現金を得る。警察に察知され追撃されるが、これを巧みにかわして身代金を手にし、児童を絞殺し、金を運んだ父親南平台もボートでひき殺してしまう。この後、警察の包囲網をぐぐり抜けて、とある教会の告悔室で若き神父賀来にいちぶしじゅう一五十一を懺悔したあと、女尼に変装してその場をも離れていくのだ。

午前九時三十分、東京新宿にある「関都銀行新宿支店」に現れた結城が女性銀行員に囲まれ、新聞の社会面の記事となつている今朝一番の事件の顛末を聞くのである。ここで、幾ら新聞社がこれを迅速に報道するとは云つても現実的に無理があることに気づく。警察がマスコミに公表報知し、事件記者がこれを社に戻つて原稿にする。これを編集責任者が校正をして印刷にまわし、輪転機にて刷り上げる。刷り上げた新聞を再度編集長が最終校正して承認し全体部数を刷り出す。この刷り出された新聞紙を輸送車に載せ、各地の新聞販売店に輸送され、販売店にはどんな遅くとも、四時過ぎには届き、これを販売店の配達人がそれぞれに届けてこれを読むのだから時間の設定に無理があることを承知しておきたい。次に女性行員の会話中に「殺人犯に、お子さんともども惨殺されたんですって！」「I

21頁」の表現は可笑しい。「殺人犯」は「誘拐殺人犯」であり、「惨殺」も男のは「絞殺」、父親は「轢殺」であった。これを一束して云っている。正しいところは文末の「んですって！」という情報推測表現だけであろう。

行員結城は、この身代金一億円を通しナンバーでない一枚一枚を揃えた。一万枚の紙幣を手控え記録したのだ。その日、Y市支店支店長のポストを提示されるが、現状維持を以て断る。この結城は「出世街道直登型」だと噂もされるのだが……。

午後六時、神父賀来と行員結城は、プライベートな服装で待ち合わせ場所で会い、結城のアジトに向かう。二人の関係は十五年間を経過し、賀来は「一蓮托生だ」「きみが破滅する時はぼくも共倒れだ。そのくらいの覚悟はある」〔27頁〕と結城に云う。そして抱き合う。

第二章 悪夢

「カナ カナ カナカナ：／カナカナ カナ カナ カナカナ」と蝸の鳴く夕景の教会。司教と賀来神父の対話ではじまる「忘れもせぬ十五年前の夏の出来事」とは……、

●鹿児島のはるか南南西諸島の沖繩よりの洋上に、沖ノ真船島おきまふねじまという、ほとんど本土の人びとに知られぬ小島があつて、私はどういふわけかその島の土を踏んだのでした。私はまだ、ものの道理もわからぬ子供で、「カラス」とよばれる非行少年一行と行動を共にしていました。当時は六十年安保と七十年安保との谷間で、例のフーテンという浮き草的な行動が世界的に流行して、中にはかなりチンピラめいた連中もいたのです。で、私は、そういうフーテンゴロめいたグループになんとはなしについて回り、彼らがフーテン王国をきずくのだといって、この島へ乗りこんでいった時……、なにが理想郷にでも出会うような期待をしてしまいました。貧しく、純朴な漁師の村と、しかし、現実には、例によって、ある一角に外国の軍事貯蔵庫があるだけでした。その貯蔵庫は島の中央の丘陵地帯にか

くれるように造られて、嚴重な警備がしかれていました。じつは「カラス」の目的は、その貯蔵庫から、なにかめぼしいものを盗みだす計画だったらしいのですが、とんでもない誤算でした。彼らの欲求不満は漁民への集団暴行という形となって現れ、私もおもしろがっていやがらせや、破壊を楽しんだのです。その時でした。ヨットで、偶然この島の近くを通ったある金持ちの青年が……。結城を連れていたのです。青年はこの島へ水をもらいに立ち寄りしました。その時、はじめて私は、結城と顔を合わせました。彼はまるで少女のような無邪気で愛くるしい子供でした。二人は「カラス」の格好のいやがらせの対象となりました。〔33頁〜37頁〕

という具合に、語り聞かされたあと、マンガ登場人物が会話風に展開していく構成手法を取っていることで、現実場面へと時空間移動していくのである。この少年の名が結城美知夫、花崎小学校四年、歌舞伎の子役である河本玉之丞の弟であった。村人そしてフーテン「カラス」たちが急変死する光景を結城と賀来は目の辺りにすることになるのだ。そして、

●私は魂が凍りつくような恐怖ですくんで動けなくなりました。そこで展開された光景は、まさしく死の世界でした。島じゅうの人間が鳥や家畜をふくめていっさい死滅していたのです。その島の貯蔵庫とは、ある極秘化学兵器の貯蔵庫だったのです。ベトナムやラオスの人間を無差別に全滅させるため……ある国が開発したMWとよばれるガスでした。その貯蔵庫からそれがもれたために、島の生きものは思わぬ死の洗礼をうけたのです。おそらく、ほんの一瞬で、直撃死に追いやったにちがいないりません。その死のガスが季節風によって洋上へ流れ去るまで、わずかな時間だったでしょう。そして、私たち二人だけが風上の洞穴にいて助かったのです。——いや、それは間違いでした。美知夫は突然はき氣と頭痛にはげしく苦しみはじめました。〔43頁〜44頁〕

ここで、同じ場所にいた賀来だけは正常であったことが謎であるが、美知夫を背負って洋上のヨット

に逃避する。

●その事件は抹殺されました。どの報道からも無視され、島の犠牲者のことは闇から闇へほうむられました。たぶん、ある国とわが国の政府の必死の隠蔽工作のためでしょう。だが、私はそれから毎日のように、あの、すさまじい形相で死に絶えている顔に、つきまとわされ、もたえ苦しみました。――とうとう私は、主におすがりするためにこの道にはいったのです。――だが私の贖罪は、死ぬまで続くでしょう。なぜなら、結城美知夫がMWのために大脳がおかされたのか知能は進んでもその心には：一片の良心やモラルのかけらもなくなってしまうたからです。彼の心には悪魔がはいりこんだのです。彼は、恐ろしい犯罪をかさねています。彼を悪霊から救うことが私の贖罪なのです。彼はそのことを知っていて、私と出会うたびにからかってきます。(会話部分略) 彼は私に道ならぬ関係をせまります。彼は時により女に豹変して私の肉体を求めます。おお：司教さま！私は身をきざまれゲヘナの火に焼かれる思いです。(46頁～49頁)

第三章 一蓮托生

美知夫は支店長に招かれ、一億円の政治ヤミ資金の算段を頼まれる。その夜、まっすぐ帰宅したと見せかけ娘美保の寝室にしのび寄る。彼女を「ピクロトキシン」という注射掖薬で殺害する。そして美保になりすまし車で家を出る。翌朝、身代金を要求する脅迫状を車のなかに置いたのである。

「脅迫状」は、稚拙を代襲い、カタカナと漢字とで二枚の紙に四行十一・二文字で書かれている。
ミホサンハアズカツタ

五千万円トヒキカエニ返ス

他言シタリケイサツヘシラセレ

バイノチハナイ

ウケトリハ

バ

とあって、この内容を言語解析できる力を試して犯人像を割り出すとしたら、漢語「他言」に注目してみれば良からう。唯一教養を知る素養語であるからだ。次に「ミホサン」と固有名詞に敬称「サン」をもって表記した点である。通常「ムスメ」であるまいか。かなり身近な人物であることが想定されてくる。次に代償金の五千万円という数値の要求は方外でない現実性を帯びた金額であることから即時性を促していることが見えてくる。四つ目に目的格の助詞「へ」を用いる地域環境にあること、五つ目に「シラセレバ」という「レバ」ことばを用いる若年齢層が犯人像として描きだされてくる。話を戻そう。美知夫はアジトに電車で戻り女装する。ここに賀来が現れ手には小銃をもって結城に迫る。そして発砲一発「ダーン、ズタ」撃ち抜いたのはなんと既に死んでいる美保だった。これを賀来は知らず、共犯者に仕立て上げられていく。

第四章 トライアングル

「一蓮托生」が物言う。賀来は誘拐犯罪者として動かされていく。日本円で手渡されたカバンを一度は受け取るのだが、次の要求をメモで手渡す。「スグ、五千万円ヲ ドルニカエ スイスノ ユニバーサル・セイビング・バンクニ フリコムベシ コウザバンゴウハ 262・MH35375ナリ テツツキガ オワリシダイ ミホヲ ジユウニスル ソノアト セキニンナシ」と書かれている。谷口澄子という女性が賀来神父を慕って訪ねて上京し、これを結城は予知していたかのよう近づく。ここでも素性は明かすのである。歌舞伎役者河本玉之丞の身内であることを…。そして、彼女を巧妙に誘惑して手込めにしてしまう。

第五章 報復

賀来神父は、この澄子のおかれた事態を凡て理會した。彼は神父らしからぬ行動に向かっていく。夜寢室に忍び込みベッドで就寝する結城をナイフで殺害する。

第六章 悪魔の化身

だが、またまた結城のトリックにひつかつてしまう。賀来神父の行動を見張ることで犯人を捕らえることに気付いた松前刑事が現れ、これも猟犬「巴」に襲わせ噛み殺させている。澄子は再び結城を訪ねるが、彼女が目の辺りにしたのは、雌猟犬「巴」とまがう結城の姿態だった。

第七章 虎口にいる

毎朝新聞の見出しに「ベテラン刑事奇禍」野犬に噛み殺されるの襲撃画像が描かれているが、現場をカメラが捉えるのは不可能だがこれを敢えて収載する。この記事を煙草を呑みながら目を通す行員結城の姿で描き出す。ここでは結城が美保に変装して、父の勤務する銀行を襲う。これで、副長が証人で、翌朝の新聞の見出しに「銀行支店長の令嬢が銀行強盗」ガードマンを射殺 海外へ逃亡か？
「支店長は汚職代議士中田英覚の後援会理事」「150頁」とあって報道されていく。結城は平常通り勤務し、中田英覚の後援会である「英魂会」に参列する。代議士秘書である滴木に「じつはですね。滴木さん。今日はあと二億ほど作りましてお知らせしようとしてきました」と囁く。

第八章 栄光の夜

衆議院選挙の投票は支障なく終わり、ただちに即日開票分の集計が始まった。自政党の順調なのびのうちに……。中田英覚二〇六、五七九。例の疑獄の中心人物中田英覚の票は予想したよりも圧倒的に強かった。「156頁」帰行の外で検察庁の目黒が結城を待ち受け、賀来神父、松前警部の名をもって訊ねる。これに結城は賀来神父のことを「りっぱな人格者ですよ」「そう！あんなに潔癖で高潔な男も珍しい。彼は殉教者にもなりますよ」「161頁」と話すのである。二人のやりとりの最後に目黒は「変死者」↓「自殺者」ということばで結城に語りかけている。牧野一家は倒産し一家無理心中、中田英覚衆議院当選。此日、支店長は結城そして美保に変装した結城を見ながらビルから落とされ死んでしまう。

第九章 殺しのプレリユード

「1/18 1 P M 鴨川邸 MW」のメッセージ。作家芳元高生先生に爆破予告の葉書、そして爆破後の電話で結城は伝える。更に、予告として「二月三十日午前九時十分、今度は平和泉泰三を殺す」「182頁」と告げる。テレビから流れる報道「中田英覚議員の親友で検察庁に起訴されていた「黒い政商」鴨川五十六が死亡しました。今日午後一時鴨川邸の近くの雑居ビルの屋上からアドバルーンが上がり、それに仕かけられた爆発物が鴨川邸の屋根へ落ち、大爆発を起こしたもので鴨川は即死。邸は火災を起こし」「183頁」を炬燵のなかで聞くシーンが描かれている。

この報道内容では、爆死した「鴨川五十六」の名を呼び捨てで報道している点に注目してみよう。実際に放送局では、このような検察庁に起訴されていた人物であれ死亡者をこのように報道するのであろうか？この点は疑問視である。

そして、結城はサングラスに鬚を貯えた変装姿で芳元と対面もする。その後「二月四日正午から一時までの間に中田英覚の秘書を議員会館の中で殺す」「190頁」と、次の予告を電話連絡する。この芳川のメモ書きを見た学生である弟等が巻き添えをくって爆死する。

第十章 疑惑の筈

検察庁特捜本部で目黒検察官から事情聴集を受ける賀来神父。ここで、「関都銀行貸付主任結城美知夫！」「しかも、なにをかくそう今をときめく関西歌舞伎の名優河本玉之丞の勘当された実の弟！」と会っている映像場面を見せられる。目黒は結城を誘拐魔と判断する発言を賀来神父に伝える。だが

証拠はないのである。「証拠はあなたの証言です」(I 202頁)と……。賀来神父は、結城を「彼は人間だ!!悪魔にとりつかれた哀れな人間なのだ」と弁護する。教会に戻った賀来神父を結城が待ち受けていて、谷口澄子たにぐちすみことの結婚をしたいことを二人して告げられる。

第十一章 第三の証人

結城は賀来と寄り添い、おき沖ノ真船島まふねじまの生物を全滅させたMWの隠匿の輸送にかかわった男藪下泰蔵を突き止めていることを伝える。「英魂会会員名簿」に「藪下泰蔵……S県N郡T町出身、中田英覚氏と中学校同窓。昭和X年同氏の仲介にて進駐軍基地、沖ノ真船島貯蔵庫跡を整備」の情報が入りが入手したことを伝えた。やがて、行動を実行に移して藪下泰蔵を会社エレベーターにて拉致し、沖ノ真船島へ連行する。

第十二章 廃墟

結城は藪下泰蔵に沖ノ真船島の十五年前の真相を独白する。生き延びた二人の子供がいたことを。「十五年!二人の子供の運命はかわった。あの日の何百という死体の表情が夜昼となくつきまとい……。ついに一人は狂ってしまった……。大時代にいえば悪魔にとりつかれたつてわけだ……。その子は、事件の元凶であるMWガスのゆくえをつきとめるために、人生を賭けたんだ……。よのためには手段を選ばない……」(I 245頁)と。そして洞窟でのあの日のことを回想する。「ぼくは他人とからだを触れ合ったのはあれが生まれて最初だった」(I 254頁)と。

第十三章 島の果て

七つの鉢を持てる七人の御使いの一人きたりわれに語りていわく「きたれ、われ多くの水の上に坐する大淫婦のさばきをなんじに示さん。地の主達これと淫を行い、地に住む者らはその淫行の葡萄酒ぶどう酒に酔よいたり」(黙示録)(I 257頁)

島の南端に向かう。亀甲墓が隠し場所であった。このとき海上から一機の駐留軍のヘリコプタが彼らを襲う。藪下泰蔵は機銃掃射で命を落とし、結城と賀来は難を逃れた。

第十四章 再会

求めて探し当てたMWのカプセルは、ガランドウだった。賀来は「目には目を……」のことは口にした。そして「復讐は終わるんだ」と結城に告げる。だが、結城は違った。「MWがほしいのさ」と告げる。MWガスの威力を試したいという。

東京に戻った賀来は神父の職を今まで通り続ける。教会を訪れた中年女性が「毒入りチョコの事件」に触れ、「無差別殺人」ということが口にされる。賀来は思う。MWガスは「毒入りチョコチョコレート」。「コーラ」なんかものの数ではない。して結城のマンションに向くと、エレベーターたにぐちすみこ口で谷口澄子と鉢合わせする。澄子は走ってその場を立ち去ろうとするが、賀来は「待てっ」と追いかけて、彼女を捕まえ、左手で平手打ちにし、彼女の唇を求め「あなたが好きなんだ!!」と告げた。そして澄子はこの顛末を結城に伝えてしまう。「神父をやめる」の一言が彼を動かすことになる。

第十五章 協力者

賀来神父は、日報新聞社会部記者青畑あおはたと巡り会う。そこで、初対面の青畑に沖ノ真船島の十五年前の真相の一部始終を語るのである。青畑は動いた。自身で島に向き調査して戻ってきたのである。「あの島の住民八百人が八百人ともこの十六年間に住みついた人間」であった事実を確かめてきたのである。聞き込みをつづけ、「とうとうみつきましたよ。二人の船主が覚えていました。十六年前、MWの貯蔵基地が撤収された時のことを……」「行く先は、内地ですよ。それも東京の近くの駐留基地だですよ」「それを立証する情報がウチの社の資料部にありました」(II 20頁・21頁)

賀来神父の電話が鳴った。結城が倒れたという。うわごとのように神父の名を呼ぶ。「死ぬな!!死

第十六章 邂逅かいこう

関都銀行で結城の突然の発作は、薬物中毒と診断され、十六年前の毒ガスにおかされたことを賀来神父は醫師に告げる。賀来神父が銀行副長と談話中に、一人の女性が現れる。中田代議士の娘と名乗る娘は三日前に婚約した結城の婚約者であった。さらに澄子も飛んできた。病室中には目黒検事がいた。「天網恢々疎にして漏らさず」ということばがありますよ……フッフ。じゃあ」〔Ⅱ 38頁〕と賀来神父に告げて病室を立ち去る。新聞記者青畑が事件の記事草案を書き上げ賀来神父に会いたい旨の電話をして出向くのだが暴徒に襲われかけたが難を逃れた。

第十七章 標的ターゲット

●アメリカでは、こんなことばがいわれているという。「生物化学兵器についてもっと一般の理解を得なければならぬ」。それは、どういうことだろうか。つまり毒ガスやナパーム弾などを国民に見とめさせるように教育するという意味だ。ベトナムにおいてアメリカはナパーム弾や枯れ葉剤などとともに毒ガスを使用したことを認めた。それはCNやDMやCSといった猛毒致死ガスでエロゾル（固体の粒子）の形でふりまかれたのである。他の致死ガスDMもベトナムのフエで使用されたが、このガスは「死亡者のものであることもやむを得ない場合使用する」とはつきりシルされ、DMとCNとが組み合わせて使われた。一九六五年「タイム」誌は、はつきり次のように書いている。「ベトナムに使用される毒ガスは人道的兵器である」。つまり、村や人を焼きつくすナパーム弾や白燐砲弾よりはましだというわけだ。だが、このガス兵器が敵の戦闘員を倒すだけではなく……。それにさらされた非戦闘員や、味方まで無差別に冒す悲劇はさけられなかった。一九六六年一月、ハーングアではアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドの各部隊が待避場の民間人を百人以上殺した。これらの生物化学兵器の実験・貯蔵には沖繩基地が使われていたことが想像される。それらの生物化学兵器の貯蔵庫オーガスト・サイトが存在していたのだった。その貯蔵庫にはDMやCSのほか、某国のフォート・デトリック研究所で開発されたMWという新型のガスが貯蔵されていたのだ。MWガスはついにベトナムでは使用されなかった。MWが開発されたのはベトナム戦争末期で、アメリカがベトナムに使用した毒ガス作戦が全世界から非難をうけた頃だったのだ。MWはその成分についてまったく不明であるが、入手した動物実験の資料に寄ると……。サル一匹に対して、わずか十五ミリグラム／立方メートルの微量で、数秒のうちに呼吸器の発作で死亡させるのだ。

第十八章 封じこめ

日本新聞の社会部記者青畑は沖ノ真船島の十五年前出身者を捜し出して情報蒐集活動が続けてきた。だが手榴弾で重傷を負う。

第十九章 アラバスク

風呂上がりの結城はテレビに映る兄の芸姿を眺める。今日は結城と中田美香との結婚式。これを澄子、目黒検事、賀来神父が遠くで意識して見守る。そこへ青畑記者の手帳が島出身の伴によって届けられる。伴は結城の放った刺客に襲われる。

第二十章 倒錯

猟犬巴に襲撃される伴、窮死に追い込まれつつも巴を焼き殺し命は助かった。結城は美香とアメリカに新婚旅行に旅立つ。このとき、極東空軍司令部の参謀総長のサチュリフ・ミンチ中将が祝儀に訪れ、岳父中田は結城にはじめて十五年来の友人として紹介する。澄子に会い、賀来神父にも会う。結城は旅立ち直前の二時間を使って賀来をゲイバーに招待する。そして一枚のスクープ写真を撮影さ

れてしまう。翌日撮影した男の呼び出しに応じ不屈の対応を見せる。「なめなさんなよ」〔Ⅱ 125頁〕。
賀来神父は聖ヨハネ病院に入院する青畑を見舞う。スクープ写真を協同新聞社に売り込むが買い取りはするがその女編集長はネタ記事にはしなかった。同性愛者の地位を保ったのである。

第二十一章 エピソード

金庫破りのカザルという男をアメリカの家族が心中したということで服毒自殺というかたちで脱獄を見事やつてのけてしまう。そのスポンサーが結城であった。

第二十二章 仮面の訪問

結城が新婚旅行先から帰国する。カザルも日本に到着、結城をボスと呼ぶ。この日澄子も空港に迎えにきて柱の陰で見守りいた。ミンチ中将のお宅を訪問する結城、ここでミンチ夫人にもミンチ中将にも結城は誘惑の手を伸ばしていく。住居の表札は「中田美知夫」となっている。ここに目黒検事が訪問し美香に洗いざらい聞かせていく。その後、美知夫が帰宅して全てを曝露し、澄子を「オモチャ」「彼女を」仕事の道具」と位置づけたうえで絞殺する。美香の声を摸写して父親に電話で安心させたうえで、手の指を切断し、軀を運び出し新幹線トンネル入り口から墜とし身元がわからない状態とした猟奇的殺人を見せる。

第二十三章 R基地に悪魔がきた

検察庁の目黒検事が第一議員会館を訪れ、中田美知夫の逮捕状を中田議員に渡す。容疑は「殺人。傷害。窃盗。サギ。暴行。その他二十八件の容疑です」〔Ⅱ 173頁〕と伝える。この際、目黒検事は「結構ですよ。カンカンノウでも、なんでも踊りましょう」〔Ⅱ 173頁〕と云って美知夫の向かった先R基地へとこの場を立ち去る。

また、賀来神父も同じくR基地へアンダーソン司教を訪ねる。要件は「この基地の中にあるMWⅡ」殺人兵器Ⅱフォート・デトリックで開発された毒ガスで数秒で何百人も殺せる」の貯蔵庫をおそうことです」。「大量生産しばらまくつもりです。全人類を殺りくすると宣言しています。彼はMWにおかされてもう余命がほとんどありません。彼は自分の死を道連れに全人類巻きぞえにしようとしているのですよ」〔Ⅱ 176頁〕と促す。非常通路から貯蔵庫へ侵入していく。そして目的のMWに辿り着き、賀来も司教とその場に現れる。美知夫は司教の説得を無視し、彼を「ドスッ！」と七発発射し銃殺する。

第二十四章 人質

目黒検事も駆けつけるがゲートで、「だめだ!?日本の警察の基地内徘徊は拒否する!!」〔Ⅱ 206頁〕。

第二十五章 破滅への出^{たび}発^{だち}

第二十六章 最後^{かけ}の賭